

前4千年紀ナイル河下流域における ラピスラズリ交易について

高宮いづみ

Lapis Lazuli and Long-distance Trade between Mesopotamia and
Egypt in the Fourth Millennium B.C.

Izumi H.TAKAMIYA

ラピスラズリは、メソポタミアよりやや遅れて、前4千年紀中葉以降ナイル河下流域にも搬入されるようになった。従来、ナカダ文化を中心とするナイル河下流域の文化の中で、初期国家形成に向けての社会的変化が加速化する過程における西アジアとの接触の影響が論議されてきたが、西アジアとの接触を示すいくつかの資料のうちでも、ラピスラズリは唯一比較的豊富な出土数があり、かつ物質的に西アジアからの搬入が想定される考古学的資料である。本稿では、従来のラピスラズリ交易に関する研究を概観した後、これまで体系的に論じられていないかったナイル河谷内部における流通と配分のシステムを考察する。

考察の結果から、ラピスラズリはナカダII期から奢侈品として多数の集落のエリート層を中心に流通していたが、ナカダIII期になって、少数の有力集落の支配者たちによってラピスラズリの交易が独占・支配されるに至った可能性を指摘することができる。

キーワード：エジプト先王朝時代、ラピスラズリ、ナカダ文化、長距離交易、交易システム

Lapis lazuli is a blue coloured semi-precious stone, which is supposed to have been extracted from mines in the Badakhshan area, Afghanistan, and regularly distributed all over the Ancient Near East from the dawn of the fourth millennium B.C. onwards. Lapis lazuli began to be imported into the Nile valley in the middle of the fourth millennium B.C., when the Naqada culture flourished in middle and southern Egypt, side by side with the Buto-Maadi culture to the north and the A-Group culture to the south.

Lapis lazuli has been studied by a number of authors who are interested in contacts between Egypt and West Asia and in their influence on the Egyptian cultures during the formation period of the Dynastic state. The time range of its imports, trade routes for reaching Egypt, status of the owners and symbolical meanings have already been discussed, but systems of its distribution within the valley itself have seldom been considered. In this paper, after reviewing previous studies on lapis lazuli in Predynastic Egypt, distribution systems in the Nile valley are discussed on the basis of contexts in cemeteries of the period.

A re-examination of lapis lazuli in cemeteries of the Naqada culture, in terms of its relationships to the size of tombs, sex of the burials and other funerary objects, demonstrates that, during the Naqada II period, lapis lazuli objects tend to concentrate in large and richly-endowed tombs, especially among large cemeteries in southern Egypt, such as Naga ed-Deir, Amrah and Naqada, showing a contrast to their occurrences also in smaller tombs in minor cemeteries in the middle Egypt, such as Matmar, Mostagedda and Badari. It is also remarkable that in the largest cemeteries in southern Egypt, i.e. Naqada and Amrah, as well as Gerzeh in the north, lapis lazuli objects were often buried with gold. These facts seem to suggest that lapis lazuli was a kind of luxury or sumptuary goods for elites, among the large communities in southern Egypt in particular, as early as the Naqada II period (contra Griswold 1992). Although it is unclear whether or not lapis lazuli was exchanged with Egyptian and/or Nubian gold, it may be assumed that elites in large communities of southern Egypt could access both. Despite the sumptuary nature of lapis lazuli, it seems to have been difficult for elites to control its value and symbolic meanings, because of the extreme scarcity of its supply.

During the Naqada III period, lapis lazuli objects concentrate in a small number of the largest cemeteries, which are supposed to have been "capitals of Kingdoms" in the latest stage of the early state formation. Since the

emergence of a long-distance trade has been inferred by the author from an investigation on exchange systems between the Naqada culture and the A-group culture, it is probable that chiefs of several powerful communities began to control the trade with Mesopotamia, and monopolize trade goods including lapis lazuli.

Key-words : Predynastic Egypt, Lapis lazuli, Naqada-culture, Long-distance trade, trade systems

はじめに

ラピスラズリは、前4千年紀以降、メソポタミアからエジプトにかけて広範囲に流通した青もしくは群青色の美しい貴石である。概ねアフガニスタンに原産地が限定されるため、古くから西アジアにおける長距離交易研究の資料として重視されてきた。前4千年紀初頭（ウバイト末期）に本格的な分布が始まったメソポタミアよりやや遅れて、エジプト・ナイル河流域にも前4千年紀中葉からラピスラズリが持ち込まれるようになり、それ以降、主に装身具の材料として珍重されてきた。

ラピスラズリがナイル河下流域に搬入されるようになった前4千年紀中葉は、エジプト北部にブトーマーディ文化が、エジプト中・南部にナカダ文化が、下ヌビアにAグループ文化が分布し、ナカダ文化を中心に初期国家形成に向けて社会の複雑化が進行しつつある時期であった。前4千年紀中葉から西アジアとの接触を示す考古学的資料が増加するため、しばしば初期国家形成に与えた西アジアとの交流の影響についてが論議されてきたが、こうした考古学的資料のうちでも、ラピスラズリは西アジアとの交流を物質的に示す貴重な搬入資料である。そこで、従来多数の研究者がラピスラズリに関心を持ち、考察を繰り返してきた。

本稿においては、前4千年紀のナイル河下流域におけるラピスラズリ交易について、従来の研究を踏まえて製品や交易ルートを概観するとともに、当時の社会と経済における役割の視点からラピスラズリを見てみたい。ラピスラズリがナイル河下流域において初期国家形成期の社会にどのような影響を与えたのか、最終的にナイル河谷内部における流通と配分のシステムを考察することによって、明らかにすることを試みる。

ラピスラズリの产地

ラピスラズリは、硫黄を含む青色の珪酸塩鉱物 (lazurite、 $[Na,Ca]_4 [AlSiO_4]_3 [SO_4, S, Cl]$) である。ユーラシア大陸において、ラピスラズリの産地は、かねてからアフガニスタン北東部のバダクシャン地方およびシベリアのバイカル湖畔にその存在が知られている他、近年パキスタンのバロチスタンに鉱脈が存在することも認識された (Moorey 1994: 86)。これらの産地のうち、西アジアに近くかつ古代から採掘されていたことが明らかになっている

のは、バダクシャン地方のいくつかの鉱脈である (Nicholson and Shaw 2000: 39)。一方、かつてエジプトにもラピスラズリの鉱脈が存在するという説が提示されたが、これまでのところその存在は確認されていない (Nicholson and Shaw 2000: 39)。そこで今日、ナイル河下流域のラピスラズリは、主にバダクシャン地方で採掘され、西アジアを経てエジプトにもたらされたという仮説が広く受け入れられており、本稿でもこの仮定に基づいて論を進めたい¹⁾。

前4千年紀のナイル河下流域は初期国家形成に向けての胎動期であり、従来その過程で西アジア方面から様々な影響を受けた可能性が指摘されてきた。これまで、西アジア方面からの影響を示す資料として、いくつかの器形の土器、彩文土器のモチーフ、円筒印章、あるいは浮き彫り装飾の図像モチーフなどが取り上げられてきたが、ラピスラズリはこうした資料の中で、唯一、比較的豊富な出土数があり、かつ物質的に西アジアからの搬入が想定される考古学的資料である。

ラピスラズリの交易研究史

ラピスラズリの交易については、これまでしばしば西アジアとエジプトとの全般的な文化交流の中で扱われてきたが、ここではラピスラズリを集中的に扱った論考を取り上げて、概観してみる。

ナイル河下流域におけるラピスラズリ交易に関する研究は、A. LucasとJ.R. Harrisによって先鞭を付けられた (Lucas and Harris 1962: 398-400)。その後、前4千年紀の交易について、最初にナイル河下流域における出土例を詳細に検討し、その歴史的な変遷を明らかにしたのはJ.C. Payneであり (Payne 1968)、同年にG. Hermannによって考察されたメソポタミアにおける交易史 (Hermann 1968) と合わせて、今日ナイル河下流域におけるラピスラズリ交易研究の基礎を形成している。

Payneによれば、ナイル河下流域のラピスラズリ最古例はゲルゼ一期 (S.D.40以降、ナカダII a/b期に相当) に年代付けられ、ナカダ文化の墓地から少数ながら普遍的に出土する搬入品である。ラピスラズリは、ときに円筒印章やハエのモチーフなどのメソポタミアと関連する遺物や要素と共に出土するほか、金との共伴例があり、概して富裕な墓に他の外来の要素とともに副葬されたという印象を

受けるという。ラピスラズリは、第1王朝初期の王ジェルの治世まで出土が継続するものの、セマイネ期（ナカダIII期）の出土例は少なく、この時期に最大の製品であるヒエラコンポリス遺跡出土の彫像が作られた。ジェル王以降の第1王朝から第3王朝にかけてエジプトからの出土例はなく、この欠落は、同じ時期に中継地となるイラクにおいてもラピスラズリの使用が途絶していることと関係する可能性があるという。

その後1990年代になって、再びラピスラズリの研究が盛んになり、数人の研究者がラピスラズリの再考察を行い、ラピスラズリの交易について、より詳細で多様な側面が明らかにされた。W. Griswoldは、ナカダ文化における長距離交易と社会階層研究の中で、墓地から出土したラピスラズリと被葬者の社会階層の関係について考察している（Griswold 1992）。また、L. Bavayは、ナイル河下流域におけるラピスラズリの出土例を再検討して、ラピスラズリとその交易について再考している（Bavay 1997）。Payneが見落としていた資料およびPayneの論考以降に検出された資料を加えてラピスラズリの集成を作成し、鉱脈、分布、社会的意義、交易ルート等について概観した。今日、この論考がラピスラズリに関する最も詳しい出土例の考察であり、最新の包括的研究になっている。一方S. Markは、メソポタミアとエジプトの交易について考察した中で、ラピスラズリについても扱い（Mark 1997）、P.R.S. Mooreyの影響を受け、特にナイル河下流域への搬入ルートについて多くを論じている。この他、王朝時代の文献資料に基づいてラピスラズリを考察したS. Aufrèreの論考（Aufrère 1997: 463-488）や、ラピスラズリの交易からエジプトにおける国家形成期について論じた大城道則の論考（Ohshiro 2000）も公刊された。

こうした豊富な研究例にもかかわらず、ラピスラズリがナイル河流域においてどのように流通したのかについて、これまで十分に考察し尽くされたとは言い難い。Markはナイル河流域外との接触に終始し、河谷内部におけるラピスラズリの分布については、初期のPayneの考察結果に依存していた。また、Griswoldはラピスラズリと社会階層との関係に集中し、墓の規模が報告され、考察対象となつた遺跡以外におけるラピスラズリの分布や製品の形態については関心を向けていない。さらにBavayは、墓地資料を使用した社会階層の復元に批判的であり、社会構造とラピスラズリの流通との関係を明らかにするすべを持たなかった。そのため、これらの論考はそれぞれ有効な成果を収めながらも、未だナカダ文化社会全体におけるラピスラズリ交易の理解の中に、様々な空白や不整合が生じている。そこで、本稿では、これらの研究成果を概括した上、ナイル河谷内部における流通と配分のシステムについて考えてみたい。

ラピスラズリの出土時期

以下の考察を行うに先立って、第1表のようなナイル河下流域におけるラピスラズリ出土例の一覧表を作成した。この表に列挙された資料の多くは、すでにPayneが取り上げ、それにBavayが追加を加えたものに基礎をおいているが、さらにBavayの論考に含まれていなかった資料の追加と修正を加えたものを提示した²⁾。

ナイル河下流域へのラピスラズリ搬入の資料は、これまで知られる限り、全てナカダ文化およびその系譜を引く第1王朝、もしくはナカダ文化の南に接して分布し、その影響を強く受けた同時期のAグループ文化の遺跡から検出されている。ラピスラズリの交易について考察するにあたって、冒頭に、その後の考察の基礎となる前4千年紀のナイル河下流域におけるラピスラズリの出土時期について概観しておきたい³⁾。

ナイル河下流域における前4千年紀のラピスラズリの出土時期について、最初に詳細な考察を行ったPayneは、ゲルゼー期初期（PetrieのS.D.40、KaiserのナカダIIaもしくはb期）に出現し、第1王朝のジェル王治世まで出土が継続すると述べた（Payne 1968: 58）。その後、Bavayが最新の年代考査を行い（Bavay 1997: 81-82）、Payneの見解を一部修正している。

Bavayによれば、年代が明瞭なラピスラズリは、ナカダ遺跡出土の例外⁴⁾を除いて、全てナカダIIc期以降に年代付けられる。従来Payneをはじめとする複数の研究者が、最古のラピスラズリ出土例をナカダII期前半（ナカダIIa/b期）に年代付けてきたが、最古例として最も有力であったマトマール（Matmar）3005号墓出土のビーズもナカダII期後半に年代付けられる可能性がある⁵⁾。ナカダ文化の編年は墓のセリエーションに基づいて行われているため曖昧な部分を排除できないとはいえ、実際ほとんどのラピスラズリはナカダIIc期以降に年代付けられ、少数の古い例もナカダIIb期からIIc期への過渡期付近に年代付けられると考えるのが妥当であろう。

Bavayの考察の結果、これまで指摘されてきたように、ナカダII期後半（ナカダIIc期）に唐突にラピスラズリの出土量が増加することが確認され（Bavay 1997: Tableau 1）⁶⁾、Payneによって指摘されていたナカダIII期における出土例の減少（Payne 1968: 58）も認められている。なお、Payneは、下ヌビアのAグループ文化遺跡から出土したラピスラズリをナカダIII期（セマイネ期）以降に年代付けている（Payne 1968: 58, 60-61）が、これらの多くは年代不明であり、少なくともコール・バハン（Khor Bahan）出土の1例はナカダII期に年代付けられる。

Payneは、前4千年紀中葉に始まる一連のラピスラズリ出土の最終例を第1王朝のジェル王治世に求めた（Payne

1968: 58) ところ、Bavayは新たにギザ(Gize)のマスターVから出土した容器断片の存在を指摘し、最終例をジェル王の次の王であるジェト王治世に延長した(Bavay 1997: 82)。しかしながら、サッカラ(Saqqara)において、さらにジェト王を継承したウディム王治世に年代付けられるマスター(3507号墓)から、ラピスラズリ製のビーズの出土が報告されており(Emery 1958: 81)、早くともウディム王治世まではラピスラズリの副葬が継続した可能性が高い。ラピスラズリがナイル河下流域にもたらされてから墓に埋納されるまでには、ある程度の時間を要したであろうことは推測に難くないが、ラピスラズリ流通の下限は、これまで指摘されていたよりも遅いことが確実である⁷⁾。

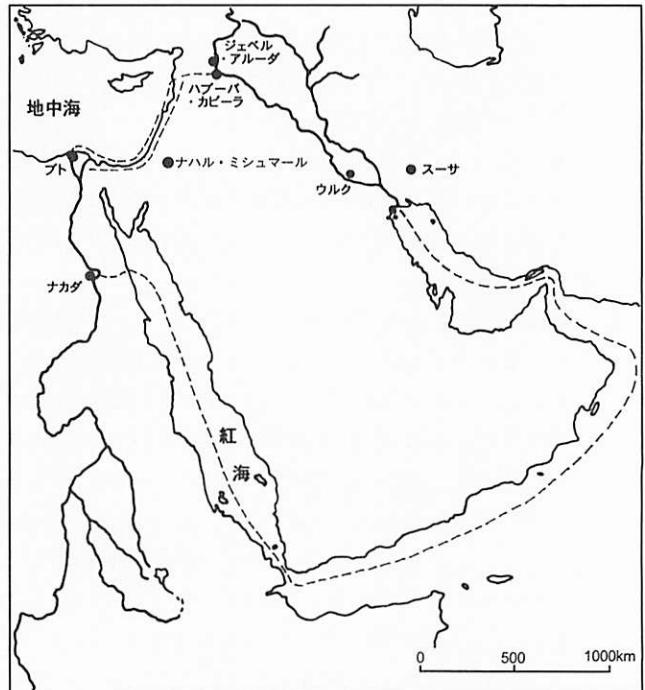
上記のように、ナイル河下流域におけるラピスラズリの流通は、おそらくナカダIIc期開始頃に始まり、第1王朝ウディム王治世まで、およそ400年間あまり⁸⁾にわたって継続したと考えられる。

ラピスラズリの交易ルート

1. 西アジアとエジプトの接触ルート

アフガニスタンのバダクシャン地方からナイル河流域まではおよそ4000kmの距離があり、ラピスラズリのエジプトへの搬入は、西アジアを経由して行われたことはほぼ間違いないであろう。そこで、ラピスラズリがエジプトに搬入されたルートが問題となるが、この問題は、従来、前4千年紀に西アジア、特にメソポタミア-イランからの様々な影響がどのようなルートを経てエジプトに到達したのかという議論の中で、総合的に論じられてきた。ここではまず、ラピスラズリを含むメソポタミア-イランからの影響全般について論じた既存の説を検討してみる。これまでの説は、特にエジプトに到達する部分に着目すると、大きくA: 南方ルート説とB: 北方ルート説に分けられるが、さらに後者はB1: 北方陸上ルート説とB2: 北方海上ルート説に分かれる(第1図)。

A: 南方ルート説は、メソポタミア-イランからの影響がペルシャ湾から紅海を通って海路でアフリカ大陸東岸に達し、東部砂漠を東西に横断するワディ・ハママート(Wadi Hammamat)を経て、エジプト南部ナイル河沿いのコプトス(Coptos)付近に達したとする説である。最初にH. Frankfortによって提唱され(Frankfort 1924: 136-138; 1951: 110-111)、後に多くの研究者に受け入れられた(Baumgartel 1955: 50)。この説は、ラピスラズリを含むメソポタミア-イランとの接触を示す証拠がエジプト南部に集中していること、およびナカダIII期に出現する図像表現がメソポタミアの中でもプロト・エラムの影響を強く受けていること、ワディ・ハママート沿いにメソポタミア製の船の岩壁画が残されていること(Winkler 1938: 28)等を考慮して



第1図 エジプトと西アジアの接触ルート

主張された。

この説に対して、近年最も強力な反論を唱えているのは、Mooreyである(Moorey 1987; 1990)。Moorey等、南方ルートに反対する研究者によれば、メソポタミア-イランとの接触を示す資料がエジプト南部に集中している点については、当時エジプト南部を中心としていたナカダ文化が活発な交易品の消費地帯であったことによって説明可能であり(当時のこの見解も、後述するようにラピスラズリに関しては修正が必要であるかもしれない)、プロト・エラムの影響が強い点については、メソポタミアからシリアに至る過程で、ユーフラテス河よりもティグリス河沿いが使用されたことによって説明できる(Moorey 1990: 67)。また、東部砂漠に描かれた船をメソポタミアに帰属させることにも疑問の余地がある(Moorey 1987: 39)。さらに、オマーン以西から紅海の西岸にかけて、これまでメソポタミアとの接触を示す考古学的資料は検出されておらず、この海上ルートが王朝時代に用いられたことを示す資料もない(Mark 1997: 130)⁹⁾。したがって、これまでのところ、南方ルートについては確実な証左が欠けていることになるが、今日でも間接的資料を根拠としてこの説を支持する研究者は少なくない(Griswold 1992: 234; Kantor 1992: 16-17; Porada 1980: 180)。

B: 北方ルート説は、いずれもアフガニスタンから北メソポタミア、シリアを経て、北方からエジプトにメソポタミア-イランからの影響が到達したとする点は同じである

が、B1：北方陸上ルート説ではシリアからパレスチナを経て、陸路エジプトに達したとするのに対して、B2：北方海上ルート説は、シリア沿岸から船でナイル・デルタに達したとする点が異なる。

B1：北方陸上ルート説は、これまでのところ少数派の説である。H. Kantor (1954) およびW. Ward (1962, 1963) の考察以降、前4千年紀のエジプトとシリア・パレスチナの間に緊密な交流があったことが認識され（近藤 1980）、近年の発掘調査がそれを裏付けている（van den Brink 1992）ものの、メソポタミア等、それより東方からの影響がシリア・パレスチナを経て陸路でエジプトにもたらされたという北方陸上ルート説を積極的に唱える研究者は多くはない。その中でMarkは、パレスチナのナハル・ミシュマール（Nahr Mishmar）から銅石器時代に年代付けられるラピスラズリ製のビーズが出土したことを重視して、シリアから陸路でパレスチナに達し、エジプトに至る接触ルートを指摘した（Mark 1997: 38）。

それに対してKantorは、エジプトにおいて見られるようなメソポタミアの図像モチーフの影響がパレスチナから全く欠落していることを根拠に、それより東方の西アジアとエジプトとの接触は、主にパレスチナを通らずに行われた可能性が高いことを指摘している（Kantor 1992: 16）¹⁰⁾。

B2：北方海上ルート説は、Wardによって提唱され（1963: 41-45）、最近になって考古学的資料の増加とともに活況を呈してきた説である（Moorey 1987, 1990；von der Way 1987, 1992；Griswold 1992: 233-234；Mark 1997: 123-124）。近年シリアの発掘調査の進展に伴って地中海に近い遺跡の様相が明らかになり、ウルク後期のウルク拡張（Uruk Expansion）が北シリアの地中海沿岸近くにも達していたことが知られるようになった（Algaze 1989）。特に比較的沿岸に近いハブーバ・カビーラ南（Habuba Kabira süd）において出土したエジプトもしくはヌビア製土器の存在（Süenhagen 1986: 22, Fig. 24）は、実際にこの遺跡が間接もしくは直接にエジプトと接触していた可能性を示唆する。一方、エジプト側についても、ナイル・デルタ地域の遺跡調査が進んだ結果、地中海沿岸部ブト（Buto）遺跡においてシリア北部との密接な関係を示す資料を見出した（von der Way 1987: 247-250；1992）ことから、シリア沿岸から海路を経て直接エジプト北部に到達するルートの存在が提唱された（Moorey 1987, 1990）。Mooreyは、その際、エジプトの少数の制御者（controllers）とメソポタミアの商人（traders）もしくはハブーバ・カビーラ南のような集落に居住するその代理人たちとの間で、直接接触があった可能性を示唆している（Moorey 1997: 40-41）。

しかしながら、北方海上ルート説の有力な根拠のひとつ

となったブト遺跡の資料に関して、最近全く異なる見解が提示された。当初、ブト遺跡の発掘調査を行ったT. von der Wayは、最下層に相当する第I層および第II層から、北シリアのアムークF期（Amuq F Phase）に特徴的な“reserved spiral decoration”で装飾された土器断片と、ウルクの日乾レンガ建造物においてモザイク装飾に用いられるような「土製釘（clay nail）」が出土したことを根拠に、ブトが北シリアのウルク・コロニーと接触を持っていたという説を唱えた（von der Way 1987: 247-250；1990）。最近、これらの資料をD. Faltingが再考した結果、アムークF期と関連づけられていた土器断片は、実はパレスチナの銅石器時代ガシュール文化と関連するものであり、土製釘も出土層が新しいものが多く、やはりパレスチナとの関連が深いことが明らかになっている（Falting 1998）。したがって、今や北方海上ルート説はエジプト側の根拠を失い、北シリア側の根拠と、初期王朝時代以降、このルートが盛んに使用された（Ward 1963: 39-45）という歴史的な事実に、その説の妥当性を依存することになった。

2. ラピスラズリ交易ルートの変遷

上記のようなルートは、西アジアとエジプトの間の交流一般について概略的に提示されたものであり、ラピスラズリについては独自に考古学的資料から検討を加える必要がある。また、これらのルートのうち必ずしも一つだけが使用されたと考える必要はなく、併用されたり、時期を違えて用いられた可能性もある。そこで、以下に、時期別にエジプト最寄りのラピスラズリ出土例を考慮しながら、ラピスラズリの交易ルートと交易ルートの時期的な変遷の可能性について考察してみたい。

ジェムデト・ナスル期に南メソポタミアからの出土例が増加するまで、メソポタミアのラピスラズリはほぼ北メソポタミアに集中しており（Moorey 1994: 88-89）、パレスチナで銅石器時代のナハル・ミシュマールにおいて、ラピスラズリの出土例がある¹¹⁾。したがって、パレスチナの銅石器時代に、Markが唱えた北メソポタミアからパレスチナを経由してエジプトに達するというB1：北方陸上ルート説は、ラピスラズリに関する蓋然性を帯びることになる。近年ブトの発掘調査結果の基づいて、パレスチナの初期青銅器時代IaがナカダIIc期に始まったことが指摘されている（Falting 1998: 373）ので、初期のラピスラズリがこのルートを経てエジプトにもたらされた可能性は排除できない。

ナカダII期中頃になると、突然ナイル河下流域からのラピスラズリの出土が頻繁になった。この時期の西アジアはウルク拡張期にあたり、シリア北部のジェベル・アルーダ（Jebel Aruda）で、ラピスラズリの未製品の出土例が報告されている（van Driel and van Driel-Murray 1979: 19

-20) 一方、パレスチナからの出土例は報告されていない。したがってこの時期に、ウルクの交易網を通じてラピスラズリが運ばれた可能性が認められ、ウルク・コロニーが形成されたシリア北部から地中海東岸近くを海路で運んだとするB2：北方海上ルート説が該当する蓋然性が高い。この説は、前述のように、一時はナイル・デルタの地中海沿岸部に位置するブトの発掘調査の結果によって支持されたと思われた。その根拠を失った現在も、エジプト外で最寄りのラピスラズリ出土地が北シリアにあること、および初期王朝時代にこのルートが用いられたことから、その妥当性は高い。

しかしながら、シリア北部のウルク・コロニーに依存した北方海上ルート説だけではラピスラズリ交易の全般を説明することが困難であることも、すでに認識されている。シリア北部のウルク・コロニーの活動期間は長く見積もっても150年間程度であるという(Stein 1999: 97)。したがって、この交易システムによって400年間あまりにわたるエジプトへのラピスラズリ搬入をカバーすることはできない。そこで、Griswoldは北シリアにおけるウルク・コロニーの廃絶以降、A：南方ルートが用いられた可能性を想定した(Griswold 1992: 234)。一方、その後もB2：北方海上ルートの継続を支持する研究者も存在する(Mark 1997: 128-131)。シリア北部のウルク・コロニーが介在した交易システムとルートを想定することによって必然的に生じる交易システムの変化については、これまでのところ十分に説明され尽くしたとは言い難い状況である。

西アジアとエジプトとの編年の問題も加わって、上記のようなシリア北部のウルク・コロニーを通じた交易がいつ頃の時期に年代付けられるかについても、不明な点が残されている。ブトの発掘調査を行ったvon der Wayは、北シリアのウルク・コロニーを通じてのエジプトとメソポタミアの接触時期は、ナカダIIa/b期からIIc期初頭までとしている(ただし、終わりのナカダIIc期初頭については、修正されるべきという)(von der Way 1992: 220, note 12)。他方、Kantorは、ウルク拡張期(KantorのProtoliterate B)とゲルゼ一期(おおよそナカダII期～III期初頭)との同時期を認め、北シリアにおいてウルク・コロニーの廃絶が起こった以降の時期を、エジプトの「0王朝」と第1王朝の一部(おおよそナカダIIIb期に相当)と推測している(Kantor 1992: 15-16)。近年R.M. Boehmer等が行ったアビュドス遺跡出土品とウルク遺跡出土品の放射性炭素年代測定結果は、エジプトのナカダIIc期がメソポタミアのウルクIV期と、ナカダIId-IIIa期がジェムデト・ナスル期とほぼ同時期であることを示し(Boehmer et al. 1993: 68)、むしろvon der Wayの説の妥当性を裏付けているように思われる。しかし、これを受け入れれば、エジプトにおけるラピ

スラズリ搬入最盛期に、交易システムの変化が起きた可能性が生じることになるであろう。シリア北部のウルク・コロニーを通じたラピスラズリの交易の問題は、編年問題とともに、解決にはしばらく時間がかかりそうである¹²⁾。

前述のように、ナイル河下流域において、ナカダIII期にラピスラズリの出土数減少が認められており、Kantorの編年案はメソポタミアにおける社会システムの変化に伴う交易システム変化として、この現象を説明できるかもしれない(註12参照)。ただし、ナカダIII期のナイル河下流域におけるラピスラズリ出土量あるいは検出量の減少は、西アジアとエジプトの間の交易ルートの変化にのみ帰せられない可能性がある。おそらく第1王朝開始以前のナカダIII期は期間が短いだけでなく、後述のようにナカダ文化社会内部において大きな変化が起こった時期であり、それに伴って墓地形成や様々な物品の配分システムが変化した蓋然性が高い(高宮 1998: 132)。

A：南方ルートには、上述のように最寄りのラピスラズリの出土例がない。南メソポタミアにラピスラズリが普及するのがジェムデト・ナスル期以降であることを考慮すると、すでにそれより古いナカダIIc期にエジプトにおいて最盛期を迎えたラピスラズリ交易の、初期の流通ルートをここに求めることは困難であるかもしれない。この場合、ラピスラズリの交易に南方ルートが使用されたとしても、ナカダIIId期以降に限定される可能性が高い。

3. ナイル河下流域の搬入地

ラピスラズリを含む西アジアの要素がナイル河下流域のどこに最初に搬入されたかについては、上述のような交易ルートによって異なることが予測される。A：南方ルートならばエジプト南部に、B：北方ルートならばエジプト北部に、ナイル河下流域最初の搬入地が予想されることになる。残念ながら、これまでのところ、最初の搬入地についても決定的な証左は得られていない。

A：南方ルートの場合、從来指摘してきたように、紅海岸からワディ・ハママートを通じて、コプトス付近のエジプト南部に西アジアの影響が直接達した可能性が高い。しかしながら、これまでのところ、紅海沿岸部においてラピスラズリの出土例は報告されていない。コプトスとナイル河を挟んで対岸に位置するナカダ(Naqada)は、後述するようにラピスラズリを比較的豊富に出土した遺跡であり、メソポタミアあるいはプロト・エラムと関連する遺物の出土も知られている(Kantor 1992: 15)が、他の遺跡からも同種の遺物の出土が知られているため、それらは搬入地であることを示す決定的な証左とはなり得ない。

B2：北方海上ルートの場合、一時ブトがその最初の搬入地であることが主張してきたものの、今日その根拠はなくなった。また、ラピスラズリに関して言えば、これまで

のところ、プトからの出土は報告されていない。報告された限り、ラピスラズリを出土した最北の遺跡は、東部デルタの地中海沿岸に近いミンシャト・アブ・オマル (Minshat Abu Omar) である (Kroeper and Wildung 1994) が、この遺跡においてパレスチナとの密接な関係は認められるとはいっても、ラピスラズリを除くと、それ以東のメソポタミア－イランや北シリアとの接触を示す資料は欠落している。

他に、北シリアのハープーバ・カビーラ南から出土したエジプトもしくはヌピア製土器は、ある程度エジプト側の搬入地を考える資料となり得る。ハープーバ・カビーラ南出土の土器断片は、D. Sürenhagenによって、ナカダ文化の“Black-incised pottery”に該当する土器であると認められた (Sürenhagen 1986: 22)。この種の土器はナカダ文化の中でも稀であり、おそらくデルタの遺跡からは出土例がなく、土器の判別が妥当ならば、ハープーバ・カビーラ南がエジプト中・南部のナカダ文化社会と、直接あるいは間接に接触していた可能性を示唆するであろう。

これまで述べてきたように、従来の交易ルートに関する諸説はいずれも決定的な考古学的証左に乏しく、明解な結論を得るためにには、さらに新しい資料の追加が不可欠である。

ラピスラズリの製品形態

第1表に示したように、これまでに102ヶ所の遺構からラピスラズリが出土したことが報告されている。製品の多くが小さなビーズであり、形態の詳細が報告されていない場合も多いが、ここでは収集できた資料を基に、製品の形態を概観してみる。ラピスラズリから作られた製品として、ビーズ、ペンダントもしくは護符、ミニチュア容器、管状製品、人像、棍棒頭模型、蛇頭部、球が報告されている。

ビーズ：ラピスラズリを用いた製品のうち、圧倒的多数を占めるのが小型の幾何学形を呈するビーズである。死者の身体を飾る首飾りや腕輪の一部に、他の素材に混じて、通常円盤形、球形、樽形、円筒形を呈するラピスラズリのビーズが使用されており、その中でも多くは小型の円盤形である。通常複数個を連ねて一つの装身具を形成するが、ラピスラズリのビーズが同じ墓に複数納められた例が少なくない。報告された限り最多の例は、ミンシャト・アブ・オマル 699号墓の200個であり、それにナカダ822号墓の70個、ゲルゼー (Gerzeh) 133号墓の47個、マトマール 2645墓の45個が続く。しかし、他の素材で製作された一連のビーズの中に、少數個のラピスラズリが含まれる例の方が多い。

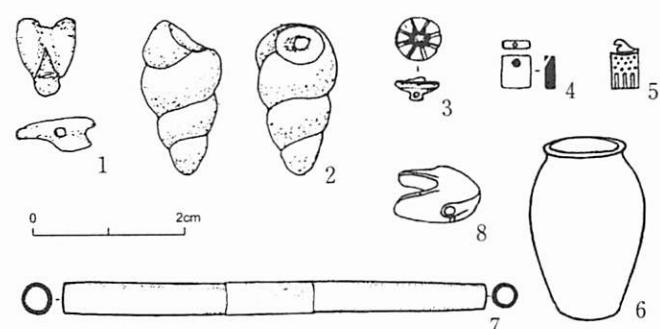
やや複雑な形態のビーズは、王朝開闢以降に知られている。アビュドス (Abydos) 遺跡第1王朝ジェル王墓 (Tomb O) から出土したミイラの腕に装着されていた4つの腕輪のうち、4番目の腕輪に用いられていた9個のビーズは、

針金を紡錘形に巻いた金製のビーズの形を模して作られている。

ペンダントもしくは護符：紐を通すことを目的とした穿孔を持ち、ビーズよりやや大型の製品をペンダントもしくは護符として分類した。おそらくこれらは、一連のビーズの中で、中心となる位置に配置されていたと思われる。

ラピスラズリが、ペンダントもしくは護符に加工された例が、少數ながら報告されている。複数の出土例がある形態として、昆虫のハエが挙げられ、アバディーヤ (Abadiyeh) から1点、ナカダから2点、ヒエラコンポリス (Hierakonpolis) から2点 (第2図-1) の出土例が報告されている。アバディーヤ出土のハエは、頭部が金で作られている。貝を象ったペンダントはバダリ (Badari) とヒエラコンポリスから出土しており、後者は巻き貝を象っている (第2図-2)。その他、葉形、方形 (第2図-4)、上端が平たくなった涙形の出土例が、それぞれ1点ずつ知られている。また、象牙製のローゼットの中心に、円形の小さなラピスラズリを配した護符がマトマール 2645号墓から出土した (第2図-3)。アビュドスにある第1王朝初期の王墓からは、王のホルス名を象ったラピスラズリ製のペンダントあるいはビーズ1点 (第2図-5) が、堆積物の中から検出されている。

ミニチュア容器：ラピスラズリを用いたミニチュア容器の出土例が、2例報告されている。ギザの第1王朝ジェト王治世に年代付けられるミニチュア容器 (第2図-6) は、全体がラピスラズリで製作されているが、アムラー (Amrah) b62号墓出土の容器は、器体が大理石で作られ、環状の底部のみにラピスラズリが用いられた。



第2図 ラピスラズリの製品形態

1・2：ペンダント (ヒエラコンポリス11号墓、Adams & Friedman 1992: fig.17)

3・4：ペンダント (マトマール2645墓: Payne 1993: Fig. 72)

5：ペンダント (アビュドスO墓、Petrie 1901b: pl.xxxxv)

6：ミニチュア容器 (ギザ マスタバV、Petrie 1907: pl.v)

7：管状製品 (ナカダ1247?号墓、Payne 1993: fig.86)

8：蛇頭部 (アビュドスO墓、Petrie 1901b: pl.xxxxv)

管状製品：ラピスラズリと金もしくは白金を用いて作られた管状製品は、ナカダとゲベル・エル＝ターリフ (Gebel el-Tarif) (?) からの出土例がある。ナカダ 1247 号墓出土の管状製品¹³⁾ (第2図-7) は、両端部がラピスラズリで、中央部が白金で製作されている。用途は不明であるが、Payneは匙の柄として用いられた可能性を指摘した (Payne 1993: 248)。

人像：ヒエラコンポリスから出土した高さ10.6cmのラピスラズリ製人像は、全身がラピスラズリで製作された人像の唯一例であるとともに、該期のラピスラズリ製品中最大の遺物である。首から上と下に分かれる2つの石塊から製作されている。体部に貫通する孔を有することから、Payneはこの像が匙の柄として用いられた可能性を示唆している (Payne 1993: 248)。また、大英博物館所蔵、出土地不明の象牙製人像には、瞳の部分にラピスラズリがはめ込まれている。

棍棒頭部模型：棍棒の模型の頭部が1例のみ、アブシール・エル＝メレク (Abusir el-Meleq) 1052号墓から出土した例がある。高さわずか2.6cmと通常の棍棒等よりも小さく、模型であると考えられ、付近から炭化した木片が出土したことを根拠に、元来木製彫像が手にしていた可能性があるとする説が提示されている (Bavay 1997: 82)。

蛇頭部：アビュドス遺跡のジェル王墓から出土した穿孔を持つ製品 (第2図-8) は、蛇を象っているが、用途不明と報告されている。また、時期についても第1王朝である確証がない。

球：ミンシャト・アブ・オマル 761号墓からは、穿孔のない直径1.3cmのラピスラズリ製球が1点出土している。

ナイル河下流域から出土したラピスラズリは、知られる限り全て製品であり、集落址の調査が進んでいないためか、未製品の出土例はこれまでのところ報告されていない。

ラピスラズリ製品形態の時期的变化について、かつて Bavayが、ナカダIII期以降になると、形態のヴァリエーションが増加し、規模の大きな製品が現れる傾向があることを指摘した (Bavay 1997: 82)。第1表が示すように、概ねこの説を受け入れができるであろう。また、ラピスラズリの搬入形態について、従来、例外的なヒエラコンポリス出土の人像を除き¹⁴⁾、多くの製品はその様式と出土コンテクストに基づいて、搬入された原料からエジプトで製作されたと考えられており (Moorey 1987: 41)、今回の考察も概ねそれを裏付けた¹⁵⁾。しかしながら、ナイル河流域のどこで製品が製作され、どのような形態で流通したのかについては、これまでのところ推測の手がかりが極めて乏しく、明らかではない。

ラピスラズリの出土状況

ラピスラズリの交易に関する論議が活発な中で、ナイル河流域内部のラピスラズリをめぐる交易システムについては従来あまり詳細な論考がなかった。交易システムは直接考古学的資料に残されないため、帰着点としての遺物分布と出土状況を根拠として推測する必要が生じる。そこでまず、ナイル河下流域における地理的な遺物分布と墓地における出土状況を検討してみたい。

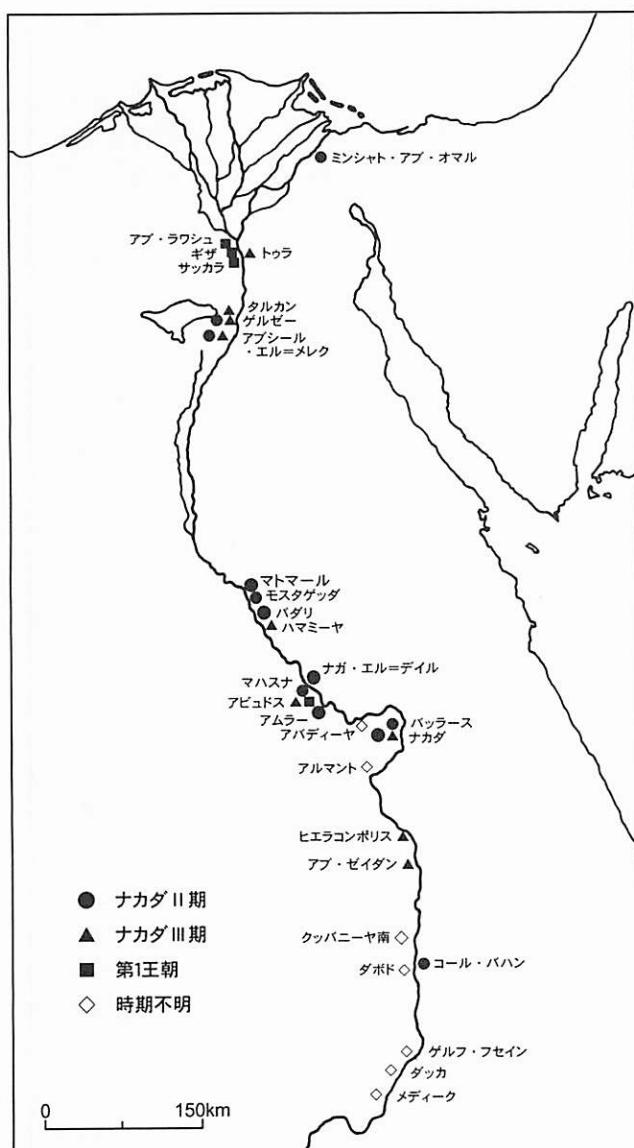
1. ラピスラズリの地理的分布

ラピスラズリはナイル河下流域において、基本的に出土量(すなわち流通量)が少ない稀少品であり¹⁶⁾、前4千年紀のラピスラズリ出土例の大半は、墓に納められた副葬品である。集落からの出土例はほとんど知られていないが、それは当時の集落の検出例自体が少ないことが影響しているかもしれない。ヒエラコンポリス出土のラピスラズリ製女性像は、集落域から出土した希有な例であり (Quibell and Green 1902: 38)、神殿奉納堆積 (Main Deposit) の付近から出土し、ナカダIII期に年代付けられるという。

出土量が僅かであるにもかかわらず、ラピスラズリの分布地域は極めて広く、第3図が示すように、ナイル河下流域において、北は地中海沿岸に近いミンシャト・アブ・オマルから、南は下ヌビアのメディーク (Mediq) までの地区で出土が確認されている。ナカダIIc期に普及が本格的に始まった当初、エジプト中・南部に集中していたラピスラズリの分布は、ナカダIId期末までにデルタから下ヌビア北部まで広がった。この現象は、主に時期に伴ってナカダ文化自体が分布領域を拡大したことに原因が求められる (Kaiser 1956: Abb.5)。ただし、ナカダIII期にナカダ文化の影響を受けてAグループ文化が成立した第2急湍までの下ヌビア南部の遺跡からは、これまでのところラピスラズリの出土例は報告されていない。

ナカダ文化のほぼ全域に分布がおよんではいるとはいえ、時期と地域によってラピスラズリの出土数が異なることも、Bavayによって指摘されている (Bavay 1997: 81)。

BavayはナカダII期のうちには、マトマールヘハマミヤの間、アビュドス地区、バッラースヘナカダの間という3ヶ所のラピスラズリ集中地区が存在することを指摘している。しかしながら、Bavayによってあまり考慮されていなかった遺跡形成時期の違いに加えて、発掘調査の密度と出土遺物の報告精度にばらつきがある¹⁷⁾ことを考慮しなければならない。こうした傾向があるデルタを含むファイユム (Fayum)への入り口以北においても、ゲルゼーとアブシール・エル＝メレクではやまとまたラピスラズリの出土が報告されており、ミンシャト・アブ・オマルにおいて知られる限り最多のビーズを出土する墓が検出されていることから、実際にはこの地域もラピスラズリの分布希薄



第3図 ナイル河下流域におけるラピスラズリの分布

地域ではなかったかもしれない。一方、ナカダ以南アスワン (Aswan) までの遺跡におけるラピスラズリ報告例は、かなり少ない。この原因の一つは、この地区において詳細な発掘調査と報告が行われた遺跡が少ないことが挙げられる。将来ラピスラズリの検出例が増加する可能性はあるが、こうした状況を差し引いても、少ない報告例がある程度実体を反映する可能性を示唆する。また、下ヌビアにおいて、ラピスラズリはメディークまでの北部からしか出土せず、出土量も極めて少なく、知られる限り全て少数のビーズである。

上記に見たようなラピスラズリの地理的分布をまとめると、ナカダII期には、ナカダ以北、地中海沿岸までにわたるナカダ文化の墓地遺跡の中に、マトマールからナカダの間にピークを持ちながらも、比較的地理的な偏りなくラピ

スラズリのビーズが分布していたことが推測される。一方、ナカダ以南の遺跡からのラピスラズリ報告例は極めて少なく、ナカダ近辺を境界として、ラピスラズリの分布構造に違いがあった可能性が指摘できよう。

ナカダIII期になると、ラピスラズリの地理的分布が著しく変化する。ナカダIIIa期にはゲルゼー、アブシール・エル＝メレク、アビュドス、ナカダ、ヒエラコンポリスの5ヶ所、あるいはアブ・ゼイダン (Abu Zeidan) を加えた6ヶ所からしか出土が確認されない。ナカダII期後半の間、ラピスラズリの集中地区として認識されたエジプト中部のマトマール～バダリまでの間とナガ・エル＝デイルから出土例がなく、ヒエラコンポリスからは初めてまとまった出土例が報告されていることは顕著である。Bavayはこの原因を、地理的な再編成に伴って起こった現象と説明している (Bavay 1997: 82)。これらの遺跡のうち、アビュドス、ナカダ、ヒエラコンポリスは、いずれもB.J. Kempによって先王朝時代の王国の首都として指摘された遺跡 (Kemp 1989: Fig. 8) であることは特筆に値するであろう。

ナカダIIIb期以降になると、ハマミーヤと第1王朝に王墓地になるアビュドスを除いて、ファイユームの入り口以北に位置する遺跡からしかラピスラズリの出土が報告されていない。このことは、おそらくこの頃ナカダ文化の人口がエジプト北部に移動したことと関連すると思われる (高宮 1998: 132)。

2. ラピスラズリの所有者

各墓地における被葬者の社会階層とラピスラズリとの関係は、Griswoldによって、墓の規模が報告されている墓地を対象とした考察が行われている (Griswold 1992)。Griswoldは、墓の規模 (墓壙の容積) を社会階層の指標と見なし、墓の規模とラピスラズリの関係を分析した¹⁸⁾。Griswoldによれば、ラピスラズリはナカダII期の間、バダリ、モスタゲッダ、マトマールでは社会階層の中・下位の人物の墓から出土し、ナガ・エル＝デイルでは高位人物の墓に集中が見られたという。したがって、ラピスラズリはこの時期にはエリートが用いる奢侈品 (sumptuary item) と見なされていなかったと思われ、特にラピスラズリ製のビーズは女性と子供の墓に集中して埋葬されていたという (Griswold 1992: 217-218)。

Griswoldが指摘し、第1表も示すように、ラピスラズリがまず女性および子供の遺体とともに副葬される明瞭な傾向があることは重要である。その主たる要因は、ラピスラズリがビーズやペンダントとして、男性よりも女性や子供が頻繁に装着する装身具に用いられていることに求められるであろう。

Griswoldの指摘のように、確かにナカダII期にラピスラズリは中・小型墓からもしばしば出土する点は、大型墓に

集中的に副葬され、当時の威信財もしくはステータス・シンボルであることが推測される象牙製品、棍棒頭、波状把手土器(PetrieのWクラス)等の遺物とは異なるように思われる(Takamiya in press)。しかしながら、いくつかの墓地における中・小型墓からの出土を根拠に奢侈品ではなかったと結論するのはやや早計であるかもしれない。というのは、ナカダ文化の墓地において、大型かつ富裕な墓は盗掘の対象となり、中・小型墓よりも著しい搅乱を受ける傾向がある。したがって、Griswold自身が認めていたように、元来高位人物の墓にもラピスラズリは副葬されていたが、盗掘の影響で失われてしまった可能性が排除できない。

また、Griswoldがラピスラズリが中・小型の墓から出土する傾向を認めたバダリ、モスタゲッダ、マトマールの3ヶ所の墓地区は、いずれもエジプト中部に位置し、ここが当時の小型集団(それぞれの墓地の構成墓数が概ね300基未満、高宮 2000)によって墓地が営まれていた地区である点は注意を要する。Griswoldは、やや大型の墓地であるナガ・エル=デイル(構成墓数約700基)において、ラピスラズリが高位人物の墓に集中する傾向を認めた他、墓の規模が報告されていないためにGriswoldの考察対象とならなかつた大型墓地アムラー(構成墓数1000基以上)においても、ラピスラズリが副葬品数の多い富裕墓から出土する傾向が認められる¹⁹⁾。ラピスラズリの交易が盛んになったナカダII期後半は、ナカダ文化の集落の間に階層構造と格差が生じた時期であり(高宮 1998: 134)、一部の大型集落で社会階層の分化が進行して、エリート層が発達した(Bard 1994)。したがって、墓地、すなわち集落によってラピスラズリの配分方法に違いが生じた蓋然性が高い。特に社会階層が明分化したエジプト南部の大型墓地では、エリートが埋葬される大型墓に高頻度でラピスラズリが副葬される一方、エジプト中部の小型の墓地においては、エリートへの奢侈品集中化が弱かったため、小型墓にもラピスラズリが副葬された可能性がある。すなわち、ラピスラズリに見られる墓地ごとの分布の違いは、こうした地域あるいは集団単位の社会状況を反映していると解釈する方が妥当である。

また、Griswoldが強調したように、ラピスラズリは女性と子供の遺体に伴って副葬される遺物であった。そこで、男性中心の社会階層組織が存在し、女性や子供の身分が男性親族のそれに沿って決定されるような場合、階層分化が進行していない集団においては、女性や子供の所有物の中に、身分が顕在化しにくいことも予想されるであろう。

上記のことを考慮すると、ラピスラズリはナカダII期から外来の稀少品としてその価値が認められており、奢侈品としての性格を備えていたと理解できる。また、ラピスラズリの墓地における分布状況に地域差があるのは、おそらく社会構造の地域差のためと解釈できるであろう。した

がって、やはりラピスラズリの所有者たちは、概してある程度高い身分の人物であったと推測される。

ナカダIII期にラピスラズリを出土した墓地は、いずれも報告密度が粗いため、多くがGriswoldの体系的な考察対象からは除外されていた。ナカダIIIa期にラピスラズリを出土し、かつ比較的詳細に墓と副葬品の内容が報告されているゲルゼー55号墓、アブシール・エル=メレク1052墓、アビュドスU墓地g墓、ヒエラコンポリス第6地点11号墓は、いずれもかなり大型で富裕な墓であり、特にヒエラコンポリスとアビュドスの墓は最大級に属す。ナカダIII期は、ナイル河下流域において地域統合が進行した時期であり、前述のごとく、アビュドス、ナカダ、ヒエラコンポリスはかねてから当時の「王国」の中心地と考えられていて(Kemp 1989: Fig. 8)、さらにその中でも最大級の墓、すなわち当時の統合された地域の支配者クラスの墓にラピスラズリが集中した様子を認めることができる。ちなみに、この時期のラピスラズリの所有者に関しては、性別・年齢のデータがない。

第1王朝にラピスラズリが出土する墓は、アビュドスの王墓、ギザやサッカラの大型マスタバ墓など、王朝時代の体制の中で王家と深く関連する可能性の高い人物の墓に集中する傾向が明瞭である。

3. 共伴関係

ラピスラズリは、しばしば一つの墓から他の外来品や金製品とともに出土することが指摘されていた(Payne 1968: 58)。こうした共伴関係も、ラピスラズリの所有者や交易システムを推測する手がかりとなる。

ラピスラズリと金が供伴する例があることが、Payneによって指摘されて久しい(Payne 1968: 58)が、その後、Mooreyは、王朝時代の交易品に基づいて、ラピスラズリ等の西アジアの産物がナカダ近辺で産出する金と交換された可能性を指摘した(Moorey 1987: 41)。またMarkは、ラピスラズリがメソポタミアにおいてときに金と共に出土すること、およびラピスラズリが多量に搬入された時期にナカダ文化が下ヌビアとの交流を深めていることを根拠として、ラピスラズリ等とヌビアの金が交換された可能性を示した(Mark 1997: 42-44)²⁰⁾。

金との共伴事例についても、詳細に見直してみると、興味深いことが明らかになる。金とラピスラズリとの共伴は、第1表に挙げた全102ヶ所の遺構のうちの21ヶ所におよぶ。ラピスラズリも金も稀少品であり、共伴遺物が報告されていない墓も存在することを考慮すれば、既知の資料のうち共伴事例が20%に達することは両者の密接な関係を示す。その中で、エジプト中部の墓地において金との供伴例は報告されていないのに対して、ナカダII期のうちには、アムラー、バッラース、ナカダというエジプト南部の大型墓地、

第1表 ナイル河下流域出土のラピスラズリ製品(1)

遺跡 (追加資料#)	遺構 (金#)	製品	時期	性別	規模 (cm ²)	所蔵	参考文献
マハスナ	H107	ビーズ	2c	-	-	-	Ayerton & Loat 1911:22
アビュドス	O(ジエル 王墓) *	ビーズ	D1 (ジエル)	-	大型 王墓	Cairo CG.52009,52011	Petrie 1901b:18, pl.I
アビュドス	O(ジエル 王墓)	ベンダント (セレク形: 1.4x0.8cm)	"	-	"		Petrie 1901b:17-18, pl.XXXV-81
アビュドス	# O(ジエル 王墓)	蛇頭部 (2.2x1.6cm)	"	"	"	-	Petrie 1901b:37, pl.XXXV-80
アビュドス	# W(ジエト 王墓)	ビーズ	D1 (ジエト)	-	-	-	Petrie 1901b:pl.XXXVIII-10
アビュドス	U-c	ベンダント(?)	3b	-	182,000	-	Dreyer et al. 1996:26
アビュドス	U-g	ビーズ	3a	-	76,500	-	Dreyer et al. 1993:28
アムラー	a096 *	ビーズ	2c	M	\$35	-	Randall-Maclver & Mace 1902:19, 37
アムラー	a118	ビーズ	2c	F	\$22	-	Randall-Maclver & Mace 1902:17-18
アムラー	a139 *	ビーズ	2c	F	\$22	-	Randall-Maclver & Mace 1902:18
アムラー	b017 *	ビーズ	2d	MF	\$17	-	Randall-Maclver & Mace 1902:20
アムラー	# b040 *	ビーズ	2cd	F	\$13	-	Randall-Maclver & Mace 1902:22
アムラー	b062 *	ミニチュア容器	2d	F	\$19	-	Randall-Maclver & Mace 1902:21, pl.VIII-4
アムラー	b062	ビーズ	2d	"	"	Oxford AM.E.36	Randall-Maclver & Mace 1902:20-21, 37-8; Payne 1993:210 (No.1716)
アムラー	b104 *	ビーズ	2d	M	\$04	-	Randall-Maclver & Mace 1902:24
アムラー	b106 *	ビーズ	2d	C	\$15	-	Randall-Maclver & Mace 1902:22
アムラー	b230	ビーズ	2d	-	\$19	-	Randall-Maclver & Mace 1902:23
アバディーヤ	B323 *	ベンダント (ハエ)	-	-	-	-	Petrie 1901b:34
バッラース	023 *	ビーズ	2d	-	-	Oxford AM.95.894	Petrie 1896:15,44, pl.LVIII; Payne 1993:208 (No.1699), Fig.72
バッラース	198	ビーズ	2cd	-	-	Oxford AM.95.871	Payne 1993:209 (No.1701)
ナカダ	0238	ベンダント (ハエ)x2	2cd	-	-	London UC5430/31	Petrie 1896:25; Baumgartel 1970:X
ナカダ	0624	ビーズ	3a	-	-	London UC.5011	Baumgartel 1970:XXV
ナカダ	0667	ビーズ	2-3	-	-	London UC.5434	Baumgartel 1970:XXVI
ナカダ	0690	ビーズ	2d	-	-	Berlin 12843	Baumgartel 1970:XXVII
ナカダ	0822 *	ビーズ	2c	-	-	Oxford AM.95.883	Petrie 1896:27; Payne 1993:206 (No.1684)
ナカダ	0836	ビーズ	2c	-	-	Oxford AM.95.877	Petrie 1896:22-23, pl.LVIII; Payne 1993:206-207 (No.2064)
ナカダ	1247? *	管状製品 (L11.2xD0.8cm)	2d	-	-	Oxford AM.95.985	Petrie 1896:28; Payne 1993:248 (No.2064), Fig.86
ナカダ	1858	ベンダント(葉)	1	-	-	London UC.4442	Payne 1968:60; Baumgartel 1970:LX
ナカダ	T05 *	ビーズ	2c	M,2F, 2F?	-	Oxford AM.95.888&95.893	Petrie 1896:19, pl.LVIII; Baumgartel 1970:LXVII; Payne 1993:208 (No.1697)
ナカダ	T29	ビーズ	-	-	-	Berlin 12848	Baumgartel 1970:LXIX
ゲベル・エル＝ ターリフ	購入	* 管状製品 (L13.0cm)	-	-	-	Cairo CG 14517	Quibell 1905:279, pl.LIX
アルマント	1400D	ビーズ	-	-	-	Oxford AM. QCL 122	Mond & Myers 1937:102-3; Payne 1993:215 (No.1744)
アルマント	1567	ビーズ	-	-	5,000	-	Mond & Myers 1937:107, pl.XLI
ヒエラコンポリス	II(Loc.6)*	ビーズ	3a	-	120,000	-	Adams & Friedman 1992:334
ヒエラコンポリス	II(Loc.6)	ベンダント(ハエ : 2.2x1.6cm)x2	3a	"	"	-	Adams & Friedman 1992:334, fig.17b
ヒエラコンポリス	II(Loc.6)	ベンダント (貝: 4.2x2.2cm)	3a	"	"	-	Adams & Friedman 1992:334, fig.17a
ヒエラコンポリス	集落城	人像(H10.6cm)	3a	-	-	Oxford AM.E1057	Quibell 1900:7, pl.XVIII 3; Garstang 1907; Porada 1980; Payne 1993:248
アブ・ゼイダン	93	ベンダント (平底涙形)	3	-	-	Brookl.09.889.304	Needler 1984:311, pl.53-cat.234
クッバニーや南	19.j.1	ビーズ	-	-	10,500	-	Junker 1919:102, 147
クッバニーや南	19.n.1	ビーズ	-	-	9,686	-	Junker 1919:102, 152
クッバニーや南	20.h.4	ビーズ	-	-	11,875	-	Junker 1919:102, 142
クッバニーや南	20.j.2	ビーズ	-	-	19,055	-	Junker 1919:102, 147
クッバニーや南	20.l.4	ビーズ	-	-	8,100	-	Junker 1919:102, 150
シェラール(Cem.7)	325	ビーズ	2-3	CC	4,500	-	Reisner 1910:25
コール・バハーン (Cem.17)	15	ビーズ	2cd	F	16,200	-	Reisner 1910:128, pl.67a2
ダボド(Cem..23)	45	ビーズ	-	F?	-	-	Reisner 1910:159
ゲルフ・フセイン (Cem.79)	190	ビーズ	-	C	1,250	-	Firth 1912:150
ダッカ(Cem.102)	190	ビーズ	-	C	12,600	-	Firth 1915:69
ダッカ(Cem.102)	504	ビーズ	-	-	6,000	-	Firth 1915:80
メディーク (Cem.148)	16	ビーズ	-	-	12,750	-	Firth 1927:222
不明	購入	人像(目象眼)	-	-	-	London BM EA.32141	Spencer 1993:口絵

第1表 ナイル河下流域出土のラピスラズリ製品(2)

遺跡 (追加資料#)	遺構 (金*)	製品	時期	性別	規模 (cm ²)	所蔵	参考文献
ミンシャト・アブ・オマル #	699(78)	ビーズ	-	F	5,500	-	Kroeper & Wildung 1994:103, Taf.23
ミンシャト・アブ・オマル #	761(110)	球(D1.3cm)	2cd	M	12,600	-	Kroeper & Wildung 1994:152, Taf.4
アブ・ラワシュ #	M19	ビーズ	D1	-	238,000	-	Klasen 1961:126, Fig.11
アブ・ラワシュ北 #	A/B墓	ビーズ	D1	-	-	Giza	Hawass 1980:242
ギザ	マスタバV annex 11 *	ミニチュア容器 (H.4.5cm)	D1 (ジエト)	-	-	-	Petrie 1907:4, pl.III, V
トゥラ	15.1.4	ビーズ	3b	-	17,500	-	Junker 1912:61
サッカラ #	3507 *	ビーズ	D1 (カテイム)	-	大型 マスタバ	-	Emery 1958:81, pl.108
タルカン	19 *	ビーズ	3b	-	26,676	-	Petrie et al. 1913:pl.LXIII
ゲルゼー	055 *	ビーズ	3a	-	-	-	Petrie et al. 1912:22, pl.V
ゲルゼー	080 *	ビーズ	2d	-	-	-	Petrie et al. 1912:22, pl.V
ゲルゼー	133	ビーズ	2d	-	-	Oxford AM11.368/9	Petrie et al. 1912:16, pl.V; Payne 1993:211 (No.1720)
ゲルゼー	142	ビーズ	2d	-	-	-	Petrie et al. 1912:22, pl.V
アブシール・エル=メレク	08.f.2	ビーズ	-	C	-	Berlin 19145	Scharff 1926:59112
アブシール・エル=メレク	1052	棍棒頭模型 (2.6x2.3cm)	3a	-	21,600	Berlin 19050	Scharff 1926:49, pl.30
アブシール・エル=メレク #	22.h.2	ビーズ	2cd	-	11,502	-	Scharff 1926:125
アブシール・エル=メレク	54.e.10	ビーズ	-	C	-	Berlin 19203	Scharff 1926:144
マトマール	1046	ビーズ	2cd	F	-	-	Brunton 1948:pls.XX, LXX
マトマール	2645	ビーズ	2c	C	8,000	Oxford AM.31.388	Brunton 1948:pl.LXX; Payne 1993: 212 (No.1728)
マトマール	2645	ベンダント (カセット D0.4cm)	"	"	"	Oxford AM.31.389	Brunton 1948:18, pls.VIII, XV-27, LXX; Payne 1993:213 (No.1729), Fig.72
マトマール	2645	ベンダント(方形 :0.9x0.7cm)	"	"	"	Oxford AM.31.390	Brunton 1948:pls.VIII, XV-28, LXX; Payne 1993:213 (No.1730), Fig.72
マトマール	2661	ビーズ	2c	F?	-	Oxford AM31.391	Brunton 1948:pls.VIII, LXX; Payne 1993:213 (No.1731)
マトマール	3005	ビーズ	2c	F	10,450	-	Brunton 1948:pls.IX, LXX
マトマール	3067	ビーズ	2d	-	-	-	Brunton 1948:pls.IX, LXX
マトマール	3126	ビーズ	2c	-	-	-	Brunton 1948:pls.X, LXX
マトマール	3134	ビーズ	2c	-	-	-	Brunton 1948:pls.X, LXX
マトマール	5112	ビーズ	2c	C	9,100	Oxford AM 32.906/90	Brunton 1948:pls.X, LXX; Payne 1993:213 (No.1734)
マトマール	5131	ビーズ	2c	F	8,400	-	Brunton 1948:pls.X, LXX
モスタゲッダ	01759	ビーズ	2c	-	-	-	Brunton 1937:pls.XXX, XXXIX
モスタゲッダ	01831	ビーズ	2c	C	8,000	-	Brunton 1937:71, pl.XXX
モスタゲッダ #	11757	ビーズ	2-3	-	11,200	-	Brunton 1937:75
バダリ	0102	ビーズ	2cd	M?	14,280	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pls.XXX, L
バダリ	0105	ビーズ	-	C	-	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pls.XXX, L
バダリ	0140	ビーズ	-	-	25,064	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pls.XXXX, XLIX
バダリ	1513	ビーズ	2c	-	8,848	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pl.XXXX, L
バダリ	1579	ビーズ	2cd	C	2,623	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pls.XXXI, XLIX,L
バダリ	1629	ビーズ	2cd	F	8,784	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pls.XXXI, XLIX,L
バダリ	1630	ビーズ	-	F	3,792	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pls.XXXI, L
バダリ	1756	ビーズ	2c	-	-	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pls.XXXI, L
バダリ	3730	ビーズ	2c	F	8,148	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pls.XXXII, XLIX
バダリ	3732	ビーズ	2cd	-	7,521	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pls.XXXII, XLIX
バダリ	3827	ベンダント(貝)	2d	-	6,204	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pls.XXXXIII, XLIX
バダリ	3839	ビーズ	2cd	-	-	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:52, pls.XXXXIII, L
バダリ	3850	ビーズ	2c	-	6,324	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pl.XXXXIII
バダリ	4602	ビーズ	2d	C	9,243	Oxford AM 24.330	Brunton & Caton-Thompson 1928:52, pls.XXXXIII, L
バダリ	4604	ビーズ	2d	C	4,816	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pls.XXXXIII, L
バダリ 3800 墓地	地表面	ビーズ	-	-	-	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:51, pl.L
ハマミーヤ 1500-1800 墓地	地表面	ビーズ	-	-	-	-	Brunton & Caton-Thompson 1928:pl.XLIX
ハマミーヤ	1765	ビーズ	3b	-	11,613	-	Brunton 1927,I:pls.XI, XVII
カワーミル	墓	ビーズ	-			MAN 77714c	Archeol.comparee:124
ナガ・エル=デイル	7290	ビーズ	2c	FFCM [F?]	25,200	-	Lythgoe & Dunham 1965:166, fig.72e
ナガ・エル=デイル	7304	ビーズ	2cd	-	56,000	Lowie 6-17171	Lythgoe & Dunham 1965:179-183; Kantor 1952
ナガ・エル=デイル	7338	ビーズ	2c	F?	37,200	-	Lythgoe & Dunham 1965:202-5, fig.90g
ナガ・エル=デイル	7340	ビーズ	-	M	12,350	UCLMA 6-3548	Lythgoe & Dunham 1965:207, fig.91e
ナガ・エル=デイル	7461	ビーズ	2cd	C+?	22,950	UCLMA 6-4368-4370	Lythgoe & Dunham 1965:286-8, fig.129f
ナガ・エル=デイル	7527	ビーズ	-	-	35,250	UCMLA 6-4044	Lythgoe & Dunham 1965:343, fig.135g
ナガ・エル=デイル	7534	ビーズ	2c	-	33,000	-	Lythgoe & Dunham 1965:347-9, fig.157b
ナガ・エル=デイル	7538	ビーズ	2cd	-	27,900	-	Lythgoe & Dunham 1965:352-3, fig.158j
ナガ・エル=デイル	7540	ビーズ	2cd	-	130,500	-	Lythgoe & Dunham 1965:359
ナガ・エル=デイル	7546	ビーズ	2cd	AA	18,375	-	Lythgoe & Dunham 1965:362, fig.163e

およびエジプト北部のゲルゼーに、この共伴関係が顕著に認められた。アムラー、バッラース（構成墓数約900基）、ナカダ（構成墓数2000基あまり）は当時の大型墓地であり、ここに大型墓地、すなわち階層分化がいち早く進行した主にエジプト南部の大型集落のエリート層に、ラピスラズリとともに金も集中している現象を見出すことができるであろう。同一墓にラピスラズリと金が共伴して出土することから、短絡的に両者が交換されたと考えることはできないが、ナカダII期後半に、エジプト南部の大型集落において、両者が同一人物のもとに集中する構造ができていたことは指摘できるであろう²¹⁾。

他にも、ナカダII期に銅製品や彩文土器(PetrieのDクラス)が比較的高い頻度でラピスラズリと共に伴している²²⁾ものの、Payneが指摘したような他の外来品との高い相関関係は明瞭には認められないようである²³⁾。

交易システム

ナイル河下流域のラピスラズリ流通地域は、それ自体約1000kmあまりにおよぶ。この流通網は、どこかでナイル河谷の外の交易網と繋がり、そして河谷内部の社会組織と深く結びついていたであろう。上記の考察を基にして、最後に交易システムについて検討してみる。

交易システムを考える上で、ラピスラズリの稀少性は、筆頭に考慮すべき事項である。ラピスラズリはわずか1%に満たない墓からしか検出されない稀少品である。年代的に見ると、平均してせいぜい1ジェネレーションに1人が所有した頻度であり、各集落にとってみれば頻度はこれより遙かに低い。もちろん、考古学的資料として未検出の資料が豊富に存在する可能性は否めないとはいっても、この稀少性は、ラピスラズリの交易が極めて稀であるがゆえに、おそらく単独では組織化され得なかったことを示すに十分であろう。Mooreyは前4千年紀後半のエジプトとメソポタミアの交流について、奢侈品(luxury items)の低頻度な行き来で特徴付けられると述べており(Moorey 1987: 41)、ラピスラズリはさらにその中の1アイテムに過ぎない。また、同じ理由で、その価値は十分認識されたかもしれないが、単独でラピスラズリが明瞭な象徴的意味を形成し得たかどうかも疑問である。

従来の交易研究は、しばしば物品が遠隔地に運ばれるとき、産地から遠ざかるにつれて流通量が減じる現象を認めてきた(Renfrew 1975)。ナイル河下流域におけるラピスラズリの地理的分布は、その稀少性に調査と報告がもたらすデータの不備が加わって、そこから流通の方向すら推測することを困難にしている。報告例の絶対数と出土製品の大きさから見れば、ナカダII期後半のマトマールからナカダまでの広い範囲に不連続なピークがあり、紅海からワ

ディ・ハママートを経てラピスラズリがナイル河谷にもたらされたという、Frankfort以来のA：南方ルート説を支持するかもしれないが、こうした集中現象は、例えば交易中心が存在する等の原因で、産地から離れた場所にも生じうることも知られていて(Renfrew 1975: 48-49)、B：北方ルート説の妥当性を排除するものではない。ただし、ナカダ以北の範囲における流通方向は不明ながらも、出土製品の量と大きさから見て、ナカダ以北のエジプト南部が中心的な消費地であった可能性が高いこと、および報告例の少ないナカダ以南の遺跡が流通網の末端に位置していたことは指摘できるであろう。ナカダ近辺の大型消費地を通過したラピスラズリは、そこに吸収されて、ナカダ以南には限られた量しか達しなかった蓋然性が高い。

こうしたラピスラズリを含む西アジアとの交易が、ナカダII期からエリート主導のいわゆる威信財経済(prestige goods economy)の一環を成していたという見解がMooreyから提示されている。メソポタミアからの物品や情報は、エリートによって個人的な装身具や通貨(currency)、あるいは限られた祭具もしくは奉納品に用いられた(Moorey 1987: 41)。また、エリートたちにとって奢侈品を獲得することに経済的な重要性はなかったかもしれないが、社会・政治的な階層を保持・拡張し、そうした物品へのアクセスをもたないグループへの後援機会を増加させることが重要であったという(Moorey 1987: 43)。他方Griswoldは、前述のように、ナカダII期の間は、エリートあるいは支配者に分布が限定されない性格を強調し(Griswold 1997: 217-219)、ナカダIII期になって初めてこの傾向が現れることを主張した(Griswold 1997: 235)。

上述のように、ナカダII期後半にラピスラズリは階層が明瞭に分かれる大型集団の墓地では大型墓に集中していることから、ある程度高価値品としてエリート層を中心に流通していた可能性が認められた。したがって、Griswoldが見出したナカダIII期になっての分布の変化は、実際は当初から稀少・高価値品として認識されていたピスラズリの、ナカダ文化社会内部における流通・配分システムが変化したことを反映する現象と解釈するのが妥当である。ナカダIII期は地域統合が進行した時期であり、ラピスラズリもこの時期に限られた大型墓地の限られた大型墓に集中する傾向が顕著である。ナカダII期には多くの遺跡からラピスラズリが出土し、ときに小型の墓にも副葬されていたことと比べれば、後者の現象は、少数のエリート層による「交易の独占と支配」という概念で説明されるであろう。ナカダIII期にラピスラズリ製品形態のヴァリエーションの増加と規模の増大が起こったことがBavayによって指摘されていて(Bavay 1997: 82)、これも一つには独占の帰結として解釈できると思われる。

筆者はかつて、下ヌビアのAグループ文化墓地におけるナカダ文化土器の分布の分析を通じて、ナカダ文化が関与する交易システムの時期的变化を考察した、その結果、ナカダII期にはナカダ文化南縁の遺跡であるアスワン付近から約150kmの範囲に限ってナカダ文化土器が分布していたのに対して、ナカダIII期になるとアスワンから約300kmの範囲まで分布が拡大するとともに、300km地点付近に分布の集中が現れること等から、この時期にナカダ文化内部と下ヌビア南部を直接繋ぐ長距離交易網が成立した可能性を指摘した(高宮 1998: 136-138; *in press*)。ナカダIII期にはラピスラズリを出土する遺跡の間隔が増大していることから、下ヌビアに見られたようなナカダIII期における長距離交易網の成立を、ナカダ文化内部およびナカダ文化と北方との交易にも推測することが可能であろう。おそらくこの長距離交易網は、ナカダIII期のいわゆる「王国」の支配者たちによって制御され、交易品は概ね独占されていた可能性が高い(高宮 1998: 138)。

第1王朝時代のラピスラズリが、王墓や大型マスタバ墓に集中する現象は、この独占的な交易体制が王朝時代の王家に引き継がれたことを示すであろう。

おわりに

西アジアとの交流が、ナイル河下流域における初期国家の形成に与えた影響については、かねてより盛んな論議のあるところであった。古くはPetrieの西アジアからの外来民族侵入説(Petrie 1920)に始まり、伝播論的なメソポタミアの影響説を経て、現在はシステム論の影響を受け、ナイル河下流域内部の社会システムに与えた影響を複数の要因の一つとして論じる段階にある²⁴⁾。この中で、Griswoldは、長距離交易の発達はナカダIII期の国家成立よりも後であることを主張し、それまでしばしば提示してきた長距離交易が国家形成への刺激剤(prime mover)として機能したという説を否定した(Griswold 1992: 237-254)。しかしながら、Griswoldも刺激剤説の否定に拘泥している点で、むしろその影響の範囲を出でていないかも知れない。

ラピスラズリはナカダII期の搬入当初からすでにその価値を認識されており、Mooreyが示唆したごとく(前述)、舶来品としてエリートたちの間で珍重されていた可能性が高い。魅力的な深いブルーの石は、舶来品のイメージと相まって、当時の人々のあこがれを誘ったであろう。こうした舶来品を所有し、身に着け、自らの身分を誇示することは、当時の社会にとって重要なことあったかもしれない。しかしながら、ラピスラズリの極めて乏しい、そしておそらくは制御不能な搬入量は、それ自体で直接経済的影響を発揮するほどの効果は期待し得ない。ここに、ナカダIII期になるまでは有効な「通貨」として機能し得ないラピスラ

ズリの性格を認識しておく必要があるであろう²⁵⁾。ナカダIII期になって、地域統合体(王国)の支配者たちによる、交易網の制御と独占が確立して初めて、搬入を制御した上でのラピスラズリをはじめとする搬入品の政治性を意図した象徴性が強化されたのではないだろうか。

末筆になりましたが、本稿の執筆に当たって、小泉龍人氏および井龍康文氏に多大なご教示をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

註

- 1)これまでのところ、ナイル河下流域から出土したラピスラズリについて、産地同定を目的とした科学分析は組織的に行われていない。したがって、当該地域出土のラピスラズリの起源をアフガニスタンのバダクシャン地方に帰す前提は、将来変更を余儀なくされる可能性があることを、あらかじめ明記しておきたい。ただし、エジプト近辺に新たな鉱脈が確認されない限り、ラピスラズリがエジプトと西アジアとの交易を示す資料である点に大きな変更はないであろう。
- 2)追加資料については、第1表の「遺跡」名の後ろに「#」を付けて示した。
- 3)本稿において、ナカダ文化編年については、主としてW. Kaiserが考案した体系を用いる(Kaiser 1957)。第1表の各墓の年代は、主にBavayと発掘報告書の編年に依存した。
- 4)ラピスラズリのペンダントを出土したナカダ1858号墓はナカダI期に年代付けられるが、出土コンテクストが明らかではないと言え(Bavay 1997: 81)。
- 5)Mooreyはマトマール3005号墓(Brunton 1948: Pl. IX/S.D.40-43)を最古例として取り上げ(Moorey 1987: 37)、おそらくPayneもこれに基づいてラピスラズリ最古の年代を決めていたと思われるが、近年T.A.H. Wilkinsonがコンピュータを用いてマトマール墓地のセリエーションを再考した結果、この墓は、Kaiserの編年のナカダII d1に相当するMatmar 2cに位置づけられた(Wilkinson 1996: 48-49)。一方、Griswoldは、マトマール3005号墓とモスタゲッダ1831号墓をナカダII b期に年代付けている(Griswold 1992: 275, 285)。
- 6)Bavayは、ラピスラズリの出土例をナカダII c期とII d期に分けて考察を行った結果、両者の間に分布地域の違いはないが、ナカダII d期に若干出土数の減少が認められたという(Bavay 1997: 81)。
- 7)本稿においては、前4千年紀に論述の焦点を絞ったため、前3千年紀に入る第1王朝後半以降の初期王朝時代遺跡から出土したラピスラズリの資料例検索は完全ではない。しかしながら、概観しただけでも、サッカラやアブ・ラワシュといった基本的な遺跡のラピスラズリがこれまで言及されてこなかったところを見ると、PayneとBavayの検索もだいぶ不完全であったことが推測される。

また、Bavayは最新のラピスラズリ出土例を概報の記述を基にミンシャト・アブ・オマルに求めている(Bavay 1997: 93)が、最終報告(Kroeper and Wildung 1994)にはこれに該当するラピスラズリの報告はなく、概報記述の誤りと見なして、本稿ではこれを採用しなかった。

なお、従来、第1王朝前半にラピスラズリの搬入が途絶した要因は、イランにおける社会変化と交易システムの変化に求められ

- るのが一般的である (Hermann 1968: 37, 53; Payne 1968: 59; Moorey 1987: 39)。これに対して、大城道則は初期国家体制の成立というエジプト側の変化に途絶の要因を求めていている (Ohshiro 2000)。第1王朝後半以降の資料収集の未完成に加えて、本稿においてはメソポタミア・イランにおけるラピスラズリ交易について本格的な考察を行わなかったため、搬入途絶の原因については言及しなかった。
- 8) Boehmer等によれば、ナカダIIc期からIIIb期までの期間は、紀元前3400~3000年頃までの約400年間である (Boehmer et al. 1993: 68)。
 - 9) ただしBavayは、該期にエチオピア産の黒曜石が紅海ルートを用いてエジプトに搬入された可能性を挙げ、紅海が交易路に使用された可能性を指摘している (Bavay 1997: 96)。
 - 10) Kantorは、パレスチナ起源の遺物がエジプト北部に集中する一方、メソポタミアからの影響がエジプト南部に集中する現象を指摘して、パレスチナとメソポタミアとの接触経路が異なっていた可能性を主張している (Kantor 1992: 17)。
 - 11) ナハル・ミシュマールの遺物の年代について、放射性炭素年代測定結果は前4千年紀後半を示し、銅石器時代に年代付けられることが確認された (Tadmor 1989: 250-251)。
 - 12) もとよりメソポタミアとエジプトの接触は希薄であり、交差年代法を用いて相対編年を決めるための資料が乏しい。Kantorは前述の対応編年を推測する際に、直接の搬入品を用いた交差年代法よりも、エジプトがメソポタミアあるいはプロト・エラムから借用したモチーフに基づいて編年関係を推測しており（実際これが現在最も普及した方法である）、さらに北シリアを含む西アジアのlate Protoliterate期における収縮と分断を考慮すると、ゲルゼー後期とProtoliterate B期を同時期と考えることがearly Protoliterateの拡張の全体像と一致するとして、むしろ文化様相の対応から編年を行った (Kantor 1992: 15-16)。結果的にKantorの編年の方が、ナカダII期後半におけるラピスラズリの盛んな搬入と、ナカダIII期における検出量の減少という現象を説明しやすくなるが、これは一種のトートロジーになる。
 - 一方、von der Wayにても、当初北シリアからの搬入品と考えていた土器や土製釘の起源に関する見解が訂正され、北シリアやメソポタミアとの相対編年を構築する確固たる資料を欠いた状態である。Bavayは、ナカダII d期に若干ラピスラズリの出土数が減少することを考慮して、Boehmer等の編年を踏まえながらも、ナカダIII期の出土数減少をウルク・コロニーの廃絶と結び付ける説に肯定的である (Bavay 1997: 96)。しかしながら、セリエーションに基づいて区分されたナカダ文化の各時期が同じ期間を有するとは限らず、単純な時期別の数量比較によって搬入量の減少を想定することは危険であろう。
 - 13) Payne (1993: 248) によれば、この管状製品には「ナカダ1349号墓」の記載があるが、Petrie and Quibell 1896には「ナカダ1247号墓」で報告されているという。
 - 14) ヒエラコンポリスから出土した人像が、製品の形で搬入された可能性が指摘されている。E. Poradaは、この像が手を身体の前で組むポーズを取っていることから、イランの影響を受けた地域、おそらくはペルシャ湾岸のどこかで製作され、エジプトに搬入された可能性を指摘したが (Porada 1980: 180)、反論もある (Mark 1997: 39-42)。
 - 15) ペンダントに見られるハエのモチーフは、ナカダ文化の中葉以降、紅玉髓など、他の在地の素材からも製作された例があり、エジプト製と推測される。アビュドス遺跡ジェル王墓出土のビーズも、モチーフはエジプトの伝統的な「セレク」と呼ばれる王名表記の形であり、同じ形態のビーズが金やファイアンスで製作された例があることから、エジプトで製作されたことが確実である。また、ミンシャト・アブ・オマル出土の直径1.3cmの球は、アラバスターおよびフリンントで製作された同じ形の球とともに出土しており、エジプトで製作された蓋然性が高い。
 - 16) 例えば、ナガ・エル=デイルのN7000墓地においては、約1000基の墓のうち9基の墓からラピスラズリが出土しており (Lythgoe and Dunham 1965)、出土頻度は1%に満たない。
 - 17) 20世紀最初の四半世紀に行われた発掘調査は、今日の基準からすると、概して調査精度が粗く、ごく一部の墓や出土品しか報告されない傾向が強い。
 - 18) 1970年代以降、墓地資料を使用した社会階層の分析が多数の研究者によって行われている（例：Bard 1994；Wilkinson 1996）。分析に際して、埋葬に投じたエネルギー量を計るべく様々な指標が用いられたが、その中でも墓の規模は、盗掘の影響を受けない良好な指標として認識されている。Griswoldは墓壙の体積を用いたが、本稿では平面積を用い、それぞれの墓の平面積を第1表に記した。
 - 比較のために該期の墓の平均規模について述べておくと、概して墓の規模は時期が下るにつれてわずかに大きくなるが、マトマールやモスタゲッダのような小型の墓地では、ナカダII期の墓の平均規模は15,000cm²程度である (Wilkinson 1994)。
 - 19) アムラー遺跡の報告書 (Randal-MacIver and Mace 1902) には、各墓の規模は報告されていないが、出土した副葬品の内容が詳細に報告され、その数と内容は、概ね墓の富裕度を示すと考えられる。アムラー遺跡の各墓から出土した遺物数については、第1表の墓の「規模」の欄に、「\$」に続けて示した。比較のために平均的な副葬品個体数を挙げると、多くの墓地で、ナカダII期の間に平均の副葬品数が7個を上回らない (Wilkinson 1996)。
 - 20) さらにBavayは、金とラピスラズリが、例えば王朝時代のような太陽と夜といった象徴性を持ってた可能性を指摘している (Bavay 1997: 83)。
 - 21) 筆者はかつてナカダ文化の歯牙・骨製品の分析から、ナカダII期後半になって、ナカダとアムラーという大型集落が、威信財を占有するようなナカダ文化の中心的集落になった可能性があることを指摘した (高宮 1994: 110-111)。本稿において、ラピスラズリと金の分布から、ほぼ同様な結果を得たことになり、ナカダ文化社会における集落間の地域統合と階層化の過程について、それを補強する資料を得たことになる。なおこの際、地理的な立地や墓地の規模から推測される集落の規模だけではなく、威信財やラピスラズリの集中によって、当時の中心的集落が特定されたことが重要である。
 - 22) 銅製品については20ヶ所、彩文土器については30ヶ所以上の共伴例を認めたが、その要因理解に及んでいないため、本稿では詳述を控えた。
 - 23) Payneが認めたような円筒印章との共伴関係は存在するものの（ナカダT29号墓およびナガ・エル=デイル7304号墓）、ナカダ文化全体におけるこうした共伴例について、本稿の限りでは評価が困難である。
 - 24) 西村正雄 (1996) が指摘した交易と国家形成をめぐる「伝播主義的」な解釈から「システム論的」解釈への移行は、当該地域の研究にも顕著であり、近年はさらにポスト・プロセス考古学の影響を受けた宗教や象徴的意味の研究が盛んになってきている。
 - 25) ナカダII期後半には、多くの墓地で「波状把手土器 (PetrieのWクラス)」が大型墓に集中的に副葬される傾向が認められる (Takamiya in press)。パレスチナ産の土器に形態の起源を持つこの

土器は、ナカダII期の初頭からナイル河下流域で模倣生産されたが、流通量の多い波状把手土器は、真に舶来のラピスラズリ等の搬入品よりも、有効な威信財として機能した可能性がある。

参考文献

- Adams, B. and Friedman, R. 1992 Imports and Influences in the Predynastic and Protodynastic Settlement and Funerary Assemblages at Hierakonpolis. In van den Brink 1992, 317-338.
- Algaze, G. 1989 The Uruk Expansion. *Current Anthropology* 30/5: 571-608.
- Aufrère, S. 1991 *L'univers minéral dans la pensée égyptienne*, 2 vols. Le Caire, IFAO.
- Ayrton, E.R. and W.L.S. Loat 1911 *The Predynastic Cemetery at el-Mahasna*. London, Egypt Exploration Society.
- Bard, K.A. 1994 *From Hunters to Pharaohs: Mortuary Evidence for the Rise of Complex Society in Egypt*. Scheffield, Scheffield Academic Press.
- Baumgartel, E. 1955 *The Cultures of Prehistoric Egypt*. Part I. London, Greenwood Press.
- Baumgartel, E. 1970 *Petrie's Naqada Excavation. A Supplement*. London, B. Quaritch.
- Bavay, L. 1997 Matière première et commerce à longue distance : le lapis-lazuli et l'Egypte prédynastique. *Archéo-Nil* 7: 79-100.
- Boehmer, R.M., G. Dreyer and B. Kromer 1993 Einige frühzeitliche 14C-Datierungen aus Abydos und Uruk. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 49: 63-68.
- van den Brink, E.C.M. (ed.) 1992 *The Nile Delta in Transition: 4th - 3rd Millennium B.C.* Jerusalem, The Israel Exploration Society.
- Brunton, G. 1937 *Mostagedda and the Tasian Culture*. British Museum Expedition to Middle Egypt, 1928, 1929. London, B. Quaritch.
- Brunton, G. 1948 *Matmar*. British Museum Expedition to Middle Egypt, 1929-31. London, B. Quaritch.
- Brunton, G. and Caton-Thompson, G. 1928 *The Badarian Civilization and Prehistoric Remains near Badari*. British School of Archaeology in Egypt and Egyptian Research Account 46. London, B. Quaritch.
- Dreyer, G., U. Hartung and F. Pumpenmeier 1993 Umm el-Qaab. Nachuntersuchungen im frühzeitlichen Königsfriedhof, 5/6, Vorbericht. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 49: 23-62.
- Dreyer, G., E.-M. Engel, U. Hartung, T. Hikade, E.C. Köhler and F. Pumpenmeier 1996 Umm el-Qaab. Nachuntersuchungen im frühzeitlichen Königsfriedhof, 7-8, Vorbericht. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 52: 11-81.
- van Driel, G. and C. van Driel-Murray 1979 Jebel Aruda, 1997-1978. *Akkadica* 12: 2-28.
- Emery, W.B. 1958 *Great Tombs of the First Dynasty*. Vol. 3. London, Egypt Exploration Society.
- Falting, D. 1998 Recent Excavations in Tell el-Fara'in/Buto: New Finds and Their Chronological Implications. In C.J. Eyre (ed.), *Proceedings of the Seventh International Congress of Egyptologists*, 365-375. Leuven, Peeters.
- Firth, C.M. 1912 *The Archaeological Survey of Nubia: Report for 1908-1909*. Cairo, Government Press.
- Firth, C.M. 1915 *The Archaeological Survey of Nubia. Report for 1909-1910*. Cairo, Government Press.
- Firth, C.M. 1927 *The Archaeological Survey of Nubia, Report for 1910-1911*. Cairo, Government Press.
- Frankfort, H. 1924 *Studies in Early Pottery of the Near East, Vol.I: Mesopotamia, Syria, and Egypt and their Earliest Interrelations*. London, Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland.
- Frankfort, H. 1951 *The Birth of Civilisation in the Near East*. Bloomington, Indiana University Press.
- Griswold, W.A. 1992 *Imports and Social Status: The Role of Long-distance Trade in Predynastic Egyptian State Formation*. Ph.D. Dissertation, Harvard University.
- Hawass, Z. 1980 Archaic Graves Recently Found at North Abu Rawash. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 36: 229-244.
- Hendrickx, S. 1996 The Relative Chronology of the Naqada Culture. Problems and Possibilities. In J. Spencer (ed.), *Aspects of Early Egypt*, 36-69. London, British Museum Press.
- Herrmann, G. 1968 Lapis Lazuli: The Early Phases of its Trade. *Iraq* 30: 21-57.
- Junker, H. 1912 *Bericht über die Grabung der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften in Wien auf den Friedhof in Turah. Winter 1909-1911*. Wien, Akademie der Wissenschaften in Wien.
- Junker, H. 1919 *Bericht über die Grabung der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften in Wien auf den Friedhöfen von el-Kubanieh-Süd. Winter 1910-1911*. Wien, Akademie der Wissenschaften in Wien.
- Kaiser, W. 1956 Stand und Probleme der ägyptischen Vorgeschichtsforschung. *Zeitschrift für Sprache und Altertumskunde* 81: 87-109.
- Kaiser, W. 1957 Zur inneren Chronologie der Naqadakultur. *Archæologia Geographica* 6: 69-77.
- Kantor, H. 1952 Further Evidence for Early Mesopotamian Relations with Egypt. *Journal of Near Eastern Studies* 11: 239-250.
- Kantor, H. 1954 The Relative Chronology of Egypt and its Foreign Correlations before the Late Bronze Age. In R.W. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*, 1-46. Chicago, University of Chicago Press.
- Kantor, H. 1992 The Relative Chronology of Egypt and Its Foreign Correlations before the First Intermediate Period. In R.W. Ehrich (ed.), *Chronologies of Old World Archaeology*, 3rd ed., vol. I, 3-21. Chicago & London, University of Chicago Press.
- Kemp, B.J. 1989 *Ancient Egypt. Anatomy of a Civilization*. London & New York, Loutledge.
- Klasens, A. 1961 The Excavations of the Leiden Museum of Antiquities at Abu-Roash. Report of the Third Season: 1959. *Oudheidkundige Mededelingen uit het Rijksmuseum van Oudheden te Leiden* 42: 108-128.
- Krooper, K. and D. Wildung 1994 *Minshat Abu Omar I. Maninz, Phillip von Zabern*.
- Lucas, A. and J.R. Harris 1962 *Ancient Egyptian Materials and Industries*, 4th ed. Oxford, E. Arnold.
- Lythgoe, A.M. and D. Dunham 1965 *The Predynastic Cemetery N7000. Naga-ed-Dér*. Part IV. Berkeley & Los Angeles, University of California Press.

- Mark, S. 1997 *From Egypt to Mesopotamia: A Study of Predynastic Trade Routs*. London, Texas A&M University Press.
- Mond, R. and O.H. Myers 1937 *Cemeteries of Armant I*. London, Egypt Exploration Society.
- Moorey, P.R.S. 1987 On tracking cultural transfers in prehistory: the case of Egypt and lower Mesopotamia in the fourth millennium BC. In M. Rowlands, M. Larsen and K. Kristiansen (eds.), *Centre and Periphery in the Ancient World*, 36–46. Cambridge & New York, Cambridge University Press.
- Moorey, P.R.S. 1990 From Gulf to Delta in the Fourth Millennium BCE: The Syrian Connection. *Eretz-Israel* 21: 62–69.
- Moorey, P.R.S. 1994 *Ancient Mesopotamian Materials and Industries. The Archaeological Evidence*. Oxford, Clarendon Press.
- Needler, W. 1984 *Predynastic and Archaic Egypt in the Brooklyn Museum*. New York, Brooklyn Museum.
- Nicholson, P. and I. Shaw 2000 *Ancient Egyptian Materials and Technologies*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Ohshiro, M. 2000 A Study of Lapis Lazuli in the Formative Period of Egyptian Culture. *Orient* 35: 60–74.
- Payne, J.C. 1968 Lapis lazuli in early Egypt. *Iraq* 30: 58–61.
- Payne, J.C. 1993 *Catalogue of the Predynastic Egyptian Collection in the Ashmorean Museum*. Oxford, Clarendon Press.
- Petrie, W.M.F. 1901a *Diospolis Parva. The Cemeteries of Abadiyah and Hu*. London, Egypt Exploration Fund.
- Petrie, W.M.F. 1901b *The Royal Tombs of the Earliest Dynasties*, part 2. London, Egypt Exploration Fund.
- Petrie, W.M.F. 1907 *Gizeh and Rifeh*. London, British School of Archaeology in Egypt and B. Quaritch.
- Petrie, W.M.F. and J.E. Quibell 1896 *Naqada and Ballas*. London, British School of Archaeology in Egypt and B. Quaritch.
- Petrie, W.M.F., G.A. Wainwright and E. Mackay 1912 *The Labyrinth, Gerzeh and Mazguneh*. London, British School of Archaeology in Egypt and B. Quaritch.
- Petrie, W.M.F., G.A. Wainwright and A. Gardiner 1913 *Tarkhan I and Memphis V*. London, British School of Archaeology in Egypt and B. Quaritch.
- Porada, E. 1980 A Lapis lazuli figurine from Hierakonpolis in Egypt. *Iranica Antiqua* 15: 175–180.
- Quibell, J.E. and J.W. Green 1902 *Hierakonpolis I*. London, B. Quaritch.
- Randall-McIver, D. and A.C. Mace 1902 *El Amrah and Abydos. 1899–1901*. London, Egypt Exploration Fund.
- Reisner, G.A. 1910 *The Archaeological Survey of Nubia. Report for 1907–1908. Vol.I. Archaeological Report*. Cairo, National Printing Department.
- Renfrew, C. 1975 Trade as Action at a Distance: Questions of Integration and Communication. In J.A. Sabloff and C.C. Lamberg-Karlovsky (eds.), *Ancient Civilization and Trade*, 3–99. Albuquerque, University of New Mexico Press.
- Scharff, A. 1926 *Das Vorgeschichtliche Gräberfeld von Abusir el-Meleq*. Leipzig, Otto Zeller.
- Spencer, A.J. 1993 *Early Egypt. The Rise of Civilisation in the Nile Valley*. London, British Museum Press.
- Stein, G.J. 1999 *Rethinking World-Systems*. Tucson, The University of Arizona Press.
- Sürenhagen, D. 1986 The Dry Farming Belt: the Uruk Period and Subsequent Developments. In H. Weiss (ed.), *The Origin of Cities in Dry-Farming Syria and Mesopotamia in the Third Millennium B.C.*, 7–43. Guilford, Four Quarters Publishing Co.
- Tadmor, M. 1989 The Judean Desert Treasure from Nahal Mishmar: A Chalcolithic Traders' Hoard?. In A. Leonard Jr. and B.B. Williams (eds.), *Essays in Ancient Civilization Presented to Helene J. Kantor*, 250–261. Chicago, University of Chicago Press.
- Takamiya, I.H. in press Prestige Goods and Status Symbols in the Naqada-period Cemeteries of Predynastic Egypt. In *Proceedings of the Eighth International Congress of Egyptologists*.
- Ward, W.A. 1963 Egypt and the Eastern Mediterranean from Predynastic Times to the End of the Old Kingdom. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 6: 1–19.
- Ward, W.A. 1964 Relations between Egypt and Mesopotamia from Prehistoric Times to the End of the Middle Kingdom. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 7: 1–45, 121–35.
- von der Way, T. 1987 Tell el-Fara'in-Buto. 2.Bericht. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 43: 241–257.
- von der Way, T. 1992 Indications of Architecture with Niches at Buto. In R. Friedman and B. Adams (eds.), *The Followers of Horus. Studies dedicated to Michael Allen Hoffman*, 217–226. Oxford, Oxbow Books.
- Wilkinson, T.A.H. 1996 *State Formation in Egypt. Chronology and society*. Oxford, Tempvs Reparatvm.
- Winkler, H.A. 1938 *Rock Drawings of Southern Upper Egypt I*. London, Egypt Exploration Society.
- 近藤二郎 1980 「ゲルゼ文化期にみられる外来要素とその流入経路について」『文研考古連絡誌』3号 1–11頁 早稲田大学考古学専攻院生協議会。
- 高宮いづみ 1994 「エジプト・ナカダ文化の歯牙・骨製品について」『オリエント』37巻1号 104–120頁。
- 高宮いづみ 1998 「ナカダ文化論—ナイル河下流域における初期国家の形成—」『岩波講座世界歴史 2 オリエント世界』125–144頁 岩波書店。
- 高宮いづみ 2000 「ナカダ文化のセツルメント・パターンについて—エジプト中部バグリ地区における墓地形成パターンからの考察—」『オリエント』43巻1号 1–18頁。
- 高宮いづみ in press 「ナイル河下流域における交易システムの発展と初期国家の形成—下ヌビアにおけるナカダ文化とヌビアAグループ文化の交易システム—」岩崎卓也監修『現代の考古学 7 国家形成の考古学』朝倉書店
- 西村正雄 1996 「長距離交易モデル」植木武編著『国家の形成—人類学・考古学からのアプローチー』169–231頁 三一書房。

高宮いづみ
近畿大学文芸学部
Izumi H. TAKAMIYA
Kinki University